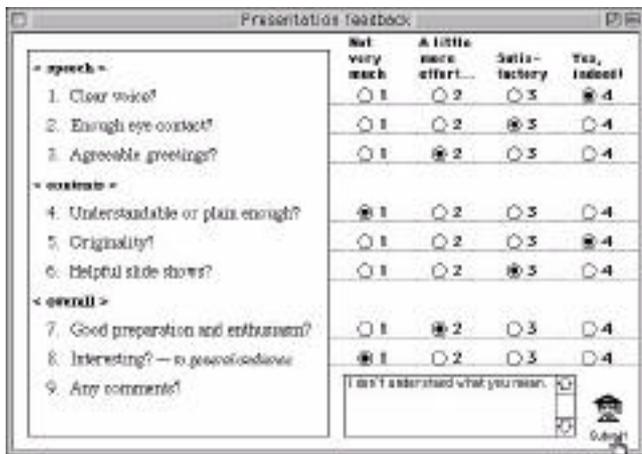


たものを翌週に学生に見せる。この時プレゼンテーションに必要な要件（声量・視線・論旨など...後述）を満たしているかどうかをチェックし、コメントを加える。

なお、この授業ではカリキュラムに基づきすべての活動が英語で行われる。

3. フィードバックの方法

練習・本番を通し発表者以外の学生は聴衆としてプレゼンテーションの評価を下すことが求められている。これは学生を遊ばせないためはもとより自己評価の意識を高めるためである。短時間で処理させるために次の 8 項目（+自由記述 1 項目）に限定した。これらはいずれも練習時に指示した要件である。



[図1：評価提示用 HyperCard スタック]

データ処理の手続きには大きく分けて 3 つのステージがある。すなわち、(1) 学生がデータを送る、(2) 教員がプログラムを起動させてデータを自動処理させる、(3) 学生が集計されたグラフやコメントを閲覧する。

具体的な手順は次の通りである。学生は授業の開始時に画面の隅に評価提示用の HyperCard スタック Presentation feedback^[6]（図 1 に評価ページを示す）を用意し、自分の所属クラス名・学籍番号・氏名を登録する。学生は次の発表者がアナウンスされるとその名前のフォルダをサーバー上で指定する。発表を聞き終えたら HyperCard の画面上で 8 項目それぞれに 4 段階の数値で評価を下す。4 段階としたのはアンケート回答の中央化傾向^[7]を避けるためである。さらに自由記述欄に具体的なコメントを記入する。‘Submit’ ボタンを押すことでデータがサーバー上の所定のフォルダに蓄積される。フォルダに学生全員のデータが入ったところで教員ないし TA は AppleScript CollectEvLines +Draw^[8] を起動させて 1 つの文書にデータを集計する（図 2）。集計されたデータは AppleWorks の表計算モジュールに送られグラフが自動的に

作成される（図 3）。グラフはサーバー上の発表者用のフォルダに送られ、学生は各自それを取り出して閲覧する。また、別の AppleScript CollectEvLines2^[9] を起動させると自由記述欄がまとめられて学生の閲覧に供される。

個々の学生の送出するデータは 1 行ないし 2 行で、1 行目に学生の学籍番号、発表グループ名、8 項目に互る評価得点（AppleWorks に引き渡す都合で項目が逆順になっている）がそれぞれタブ区切りで記されている。2 行目には自由記述が記されている。

学生が ‘Submit’ ボタンを押すと 1 名分の評価データが 1 個のファイルとなって、発表者用に個別に作られたフォルダに保存される。このままでは処理できないので、CollectEvLines+Draw はこれらのファイルを 1 つずつ開き、1 行目を新しいファイルにコピーする（CD-ROM スクリプト 26 ~ 35 行）。それを繰り返してデータを蓄積したものが図 2 に示すファイル内容である。ここでは学生 1 名のデータが 1 行分のレコードとなり、レコード内のフィールドはタブで区切られている。

009009	Ramen	3	4	4	4	4	3	3	3
009010	Ramen	3	3	3	3	3	3	3	3
009018	Ramen	3	3	4	3	3	3	3	3
009021	Ramen	4	3	4	3	3	3	2	3
009031	Ramen	4	4	4	3	3	2	2	3
009051	Ramen	4	3	4	4	4	3	3	2
009057	Ramen	4	3	4	4	3	3	3	3
009067	Ramen	4	4	4	3	3	2	2	3

[図2：集計された評価の例。左から評価者の学籍番号、発表者のグループ名、得点]

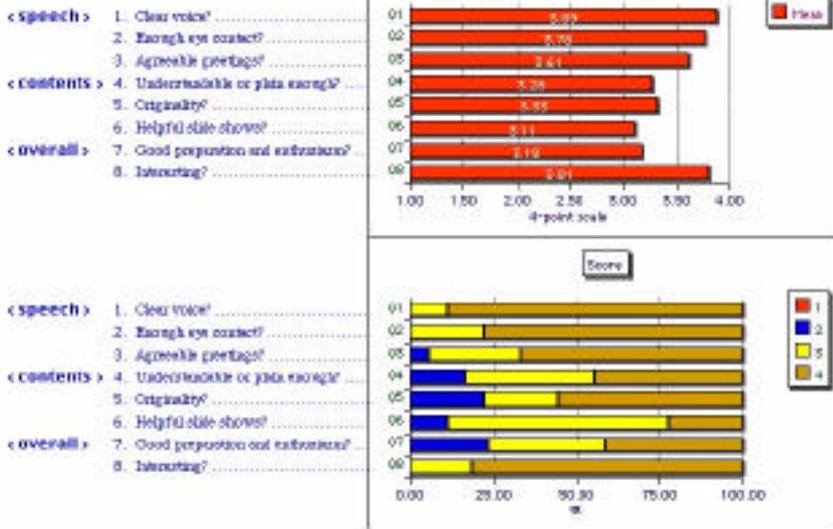
これで 1 つの発表に対する評価データの形式が整ったので、次にこれを AppleWorks の評価フィードバック用テンプレート内の表計算部分に流し込む（同 58 行）。このテンプレートでは表計算部分のデータがグラフに反映されるようになっているので即刻グラフが描画される（図 3）。

さらに AppleScript はこのグラフの保存先を尋ねてくる。これは授業開始前に予めテンプレートを PICT 形式で保存するように印刷出力先を指定しておいたからである。ここで発表者をその名前とするサーバー上のフォルダを指定するとその中にグラフが PICT ファイルとして保存される（同 59 行）。この際ファイルのクリエイターが JVWR に変更され（同 64 行）、学生はこのファイルを回収後ダブルクリックするだけで JPEGView で開くことができる。

4. 効果

このフィードバック形態に対して学生（n=73）の反応を調査した。表 1 にその結果を示す。ここで ‘Major class’ と

ID = 009



【図3：グラフ化された評価の例】

は評価対象の大まかな分類を，‘Value’ は評価が肯定的か否定的かを，‘Cnt’ は評価の頻度を，‘Reason’ は評価の内訳を，それぞれ表す．複数回答があったので頻度総計は人数に一致していない．これによると，全体の 8 割以上の回答がこの方式を積極的に支持していることが判った．しかしその半分以上が「視線の使い方がうまくないことがわかった」「声量が足りないようなので反省した」などの自己評価に繋がるもの (Indication for self-evaluation) でフィードバックの画像表示そのものに対する評価 (Evaluation of the system) ではない．後者に対する代表的な意見は「注意

Major class	Value	Cnt	Reason	Cnt
self-eval	positive	41	eye-contact	20
			voice	15
			slide show	1
			general / no reference	2
Evaluation of the system	positive	29	clear, useful, interesting	23
	neutral	2	general / no reference	5
negative	negative	8	not useful / not efficient	3
			shocking	4
			general / no reference	1
Awareness of audience	(neutral/pos)	6		
Total		75		

【表1：グラフ化フィードバックに対する学生の反応】

事項がよくわかる」「明示的でよい」「面白い」などであった．反面，否定的な意見としては「効果が薄い」「ショッキングだ」などが見受けられた．

ここで興味深いのは ‘Awareness of audience’ という範疇のもとに集められた意見で，学生が仲間の“目”を意識していることが判る．「他の人たちがこんな風にコメントしてくれるのは面白い」「手を抜いたところに低い点が付けられていて，みんなちゃんと聞いていると思った」「アイコンタクトがうまくできないことは判っていたが，そのと

おり指摘された」などと評価している．

5. おわりに

どんなに適切なフィードバックを与えても機会を逸しては効果は少ない．プレゼンテーションをした直後の記憶が新しいうちに評価を返すことは最適な強化因子として働くことになる^[10]．

AppleScript による集計の自動化は学生のためばかりではない．これまで教員が手作業で時間をかけて集計していた部分を大幅に省力化できる．これにより教員はプレゼンテーションの内容指導等により重点を置くことが可能になる．また，この自動化は語学だけでなく他の科目でも汎用的に利用

できる．学内 LAN とノートパソコンの有効な利用法として推奨したい．

参考文献

- [1] Lindquist, Judy : “‘No, Mother, I Don’t Speak Japanese’: learning to teach in an ESL classroom.” *Insights into Open Education*, **24**(4), 9, 1991.
- [2] Johnson, Orin G : “Enhancing basic public speaking skills through the use of creative in-class activities that require thorough audience analysis & adaptation as a part of general speech preparation.” Paper presented at the Annual Meeting of the Southern States Communication Association (Savannah, GA, April 2-6, 1997), 1997.
- [3] CD-ROM 資料参照 : ¥cdrom¥presentation_feedback¥procedure.pdf
- [4] 安間一雄 : 「ノートパソコン利用を考える (事例2) : 東京薬科大学生命科学部 (マルチメディア英語教育) .」 『私情協ジャーナル』, 7(4), 18-19, 1999.
- [5] 安間一雄 : 「画面共有ソフトで授業の可能性を上げる .」 私立大学情報教育協会第 7 回情報教育方法研究発表会, 1999.
- [6] CD-ROM 資料参照 : ¥cdrom¥presentation_feedback¥Presentation feedback
- [7] Oppenheim, A. N. : *Questionnaire Design, Interviewing and Attitude Measurement, new ed.* London: Pinter, 1992.
- [8] CD-ROM 資料参照 : ¥cdrom¥presentation_feedback¥CollectEvLines+Draw および ¥cdrom¥presentation_feedback¥CollectEvLines+Draw.txt
- [9] CD-ROM 資料参照 : ¥cdrom¥presentation_feedback¥CollectEvLines2 および ¥cdrom¥presentation_feedback¥CollectEvLines2.txt
- [10] Koberl, Rachel : “Presentable Presentations.” *ESP-Spectrum* (Slovakia), **13**, 12-17, 1997.